

## 阪大オペラ20周年を顧みて II

大川創業株式会社 名誉顧問  
阪大オペラ ディレクター

大川進一郎

第6回はモーツァルトの「コジ・ファン・トゥッテ」(05年8月7日)。モーツァルトが作曲したオペラの代表的な作品である。「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」「魔笛」と合せて4大オペラと呼ばれている。来年の阪大オペラでも「コジ・ファン・トゥッテ」を上演するので、乞うご期待!である。

第7回は、これまたモーツァルトの「ドン・ジョバンニ」(06年7月30日)。この時も、テナー歌手の清原邦仁氏にドン・オッタヴィオ役をお願いした。演出家の顔も持つ彼は、関西歌劇団の主演を務める実力があがりながら、常にこれから伸びそうな若手を主演に任命し自分は端役に徹する。そして練習には全て参加し、テナー、バリトン、パートに関係なく欠席者の穴埋めをして下さる貴重な存在。大変助けて頂いた。ご成功をお祈りいたします。

第8回もモーツァルトの「フィガロの結婚」(07年8月19日)。第1回に続き2回目の公演となった。長年指揮を務めて下さった河崎氏がロシアに留学されたので、神戸フィルで振っているというA氏に指揮をお願いした。彼は熱血漢で、キャストにもオケ奏者にも精力的に檄を飛ばす。阪大オペラ20回の中でも異色の指揮者だった。元々アマチュアオケであり、一生に一度はオケをバックに歌いたいという人達の集まり。常に行動を共にしているわけではないので、団員同志で助け合うということはない。APAのオケもレベルが違うし、どちらかといえばソロかカルテット止まりだから、不満が爆発。拗ねて次の練習に出て来ない者も出る始末。オケ、歌手ともにレベルアップしなければと痛感した。

第9回はレハールの「メリー・ウイドウ」(08年8月31日)。暗いムードを一新する為に、指揮者を第1回からのコンサートマスターで、毎年オケを指導して頂いたギオルギ・バプアゼ氏に依頼した。これが大当たり!以後今日までずっと指揮をお願いしている。オペラはイタリア発祥で、ヴェルディの「ファルスタッフ」以外は悲劇である。ドイツ人のモーツァルトはオペラといっても悲劇というより喜劇に近い作品を数多く作った。J・シュトラウスⅡの「こうもり」もオペラというよりオペレッタ(喜歌劇)に近い作品だが、「こうもり」はオペラと呼び、「ジプシー男爵」はオペレッタと呼ばれる。一般的にオペラの方がオペレッタより格上の為か・・・。劇場も、例えばウィーンでいえばオペラはウィーン国立歌劇場、オペレッタは同じ国立でもフォルクスオーパーで上演され、逆転することはない。

話を元に戻す。オペラはイタリア発祥だから歌詞はイタリア語で書かれていたが、モーツァルトはこれに反発

して、彼の後期の作品「魔笛」あたりからドイツ語の歌詞に変わっている。しかし、歌ではなく、レチタティーボといって筋書きを説明する時は大体が母国語になる。ヴェルディの「ファルスタッフ」が書かれたのは1892年で、没後142年経っているので、「ファルスタッフ」を上演しても著作権に引っ掛からないが、オペラの歌の部分は、イタリア語でもレチタティーボの部分は日本で上演される場合はもちろん日本語。50年以上前に日本語で歌われたオペラなら著作権に引っ掛からないが、日本語訳ができて未だ50年経っていない、つまり1970年以降に日本語訳を付けた作品を無断で使えば著作権に引っ掛かる。昭和40年代といえ、西洋音楽がどっと日本に入って来た頃だから要注意だ。

F・レハールの「メリー・ウイドウ」は1940年作曲だから80年経っているので上演しても良いが、日本語で歌う場合は1970年以前に訳されたものしか使用できない。そういう理由で「メリー・ウイドウ」の日本語訳者である、関西喜歌劇協会会長が住んでおられる、住吉大社近くのご自宅に会長を訪ね、著作権使用料として10万円を支払った。

第10回はG・ビゼーの「カルメン」(09年10月4日)。このカルメンでは色んなことを実験してみた。タイトルが阪大オペラなので、阪大に所縁のある人に出演して頂いてはと、阪大基礎工学部卒、阪大工学部助教授を経て、浜松の分子化学研究所に教授として転勤されたB先生に出演を依頼した。すると2つ返事で了承を得ることができた。研究されている内容は、自動車や人間、建物のように凹凸があっても構わない。物の硬さも関係ない。服やシャツにエレメントを織り込み、有機太陽電池を発生する世界初の「水平交互多層接合」という新概念有機太陽電池を実証された。ノーベル賞授賞式でオケをバックに「カルメン」のホセのアリアを歌って世界をアッと言わせたい。天は二物を与えずというが、テナー歌手としての声量は最高級だ。ただ、お忙しい方なので、ステージ上での立ち居振舞いに、もう少し時間を割いて頂くと有難い。これも場数を踏めば自然に具わってくるので心配ない。B先生が出演されるなら、C先生だって、D先生だってオペラを歌えるよ!と来た。練習で歌って頂いたが、正式なレッスンを受けてはおられない様子。そこで、ダブルキャストにして本番を乗り切った。阪大フラスコ研究部の学生たちが踊り、ステージに花を添えてくれた。やはりそこはプロとアマ。「歌える」と「人に聞いて頂く」とでは大きく違うことが身に染みた。

第11回はヨハン・シュトラウスⅡの喜歌劇ハイライト(10年8月29日)。毎年、日本では第九で1年を締めくくることが、欧米の年末、キリスト教信者はミサ曲、一般的にはオペラ「こうもり」、子供は「くるみ割り人形」、そして新年早々「ニューイヤーコンサート」で1年が始まる。ニューイヤーコンサートで最も多く演奏されるのがヨハン・シュトラウスの作品だが、「ジプシー男爵」の中に素晴らしい曲が多い。メジャーな「こうもり」よりもこりゃいいぞ! と思い、「こうもり」と「ジプシー男爵」の良いところ取り。つまり、ハイライトとして公演した。演奏する曲目、歌手の選定は、当時私が理事長を務めていた関西歌劇団の事務局長を経て堺シティオペラの事務局長を務め、現在は関西二期会のテナー歌手として活躍されている西口浩二氏にお願いした。馴染みのない「ジプシー男爵」の解説は、西口氏の奥様で、大阪音大で講師をされている演出家の藪川直子氏に依頼した。

第12回はヴェルディの「椿姫」ハイライトとマスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」全曲で二部公演とした(11年8月28日)。オペラはソリストが歌うアリアだけでなく、合唱も必要だ。当初はソロの演奏曲が多かったが、「ジプシー男爵」や「魔笛」などではソロ曲だけではあつという間に終わってしまい、2時間もたない。それで、関西二期会オペラコーラスシンガーズ、RJCAアカデミー、大阪桐蔭中高合唱団の方々にも応援して頂く機会が増えたので、コーラスがとてもよく響く、カヴァレリア・ルスティカーナを取り上げることにしたが、今度は反対にカヴァレリア・ルスティカーナ全曲だけでは時間が余ってしまうので、歌手の誰もが歌いたがる「椿姫」の良いところ取り、つまりハイライトを加えた二部形式の公演となったのだ。

第10回を超す頃になると、観客も段々増えてきて、こんなに良いオペラを無料で観て本当にいいの? という声がチラホラ出てきて、先輩の理事の中からもこれは良い企画だと、第1回から多額の寄付を頂き、無料と言っても実際掛かる費用を支払わなければならないので、その一部に充てさせて頂いてきたが、その話を聞いたチェロ奏者が、「じゃあ、喜んで捨てる金」つまり「喜捨箱」をホールの出口に置いてはどうでしょうか? と提案してくれた。私は間髪入れずにそれを受け入れ、オケはアマだからいいとして、ホール全体に歌声を響き渡らせる歌手達、指揮者には何が何でも渡さねば。指揮者のバブアゼ先生はじめプロの演出家や歌手、演奏家にわずかながらお礼をすることができるまでになった。

関西フィルの練習場において造った五番館のホールを空いている日に無料で使ったとしても、明石から練習

に参加する人は、その運賃だけでも馬鹿にならない。それが本番まで10回以上。しかも出演料無料なので、出演する人は大変だ。

歌手達も喜んでくれホッとした半面大変なことが起きた。主役のテナー、平本先生がゲネプロの30分前になっても姿を現さない。これまで、日曜日本番、前日の土曜日にリハーサルだけを行ってきたが、リハーサルも公開すれば献金があるのでは…との助平心から“公開リハーサル”と命名し、練習風景を見学されるのも何か上達するヒントになりますよ。と銘打って「喜捨箱」を設置したが、あまり観客が来ないばかりか、公開リハーサルが本番前日にあるので、その前日の午前10時からの通常リハーサルはないものと勘違いされておられ、プロは全てないので遅れて来られた。

その間、平本先生の携帯に何度電話をかけても出られない。ついに代役を探すことになった。阪大オペラに多大な貢献をしてこられた清原氏の自宅が近いので連絡すると、当日吹田市から名誉市民表彰されるので断られ、次に瀬田雅巳氏に電話をかけると、そりゃ大変だ! と車で駆けつけて下さった。急遽代役になった瀬田氏が指揮者から特訓を受けている時に、平本先生が控室にひょっこり現れた。「明日公開リハがあるから今日はほかのオケ同様リハはないですね?」とすました顔で言われたので、一同口をあんぐり。とにかく、衣装を変えて何とか公開リハに間に合う事ができ、一同やれやれと胸を撫で下ろした次第である。

昨年、第20回の「ツイゴイナー男爵」も日本語訳の著作権使用料発生期間がきわどかったので、布埜秀昉先生に相談すると、「私の家内にやらせます」と涼しい顔。奥さんの洋子先生は、以前大阪音大でオペラ科の教授をされていたそう。ご主人の秀昉先生がイタリアに8年も留学されていた名テナー歌手ということは知っていたが、奥さんがドイツ語を和訳できるとはとうてい知る由もなかった。そこで、洋子先生にお願いしたところ、実際、わずか10日足らずで「ツイゴイナー男爵」全曲を和訳して下さった。それで著作権使用料を払わずに済んだ。これまで20年の阪大オペラの歴史の中で、特筆すべき思い出の一つであるが、オペラをタダで和訳できたのは、ひとえに演出・脚本をお引き受け下さった、布埜洋子先生の御尽力の賜物である。

(電気 昭和32年卒)